



転換期の宣言

巻頭言

岡田 實*

1983年を迎えるに当り、ここ数年の世の中の変化の様相を見るに内政的にも外交的にもまた個人的にも国家的にも国際的にも変革の波がおしよせているようである。

落合信彦氏の著書1983年の恐怖や、アメリカ最後の誤算などによっても近づく世界的動揺が示唆されている。落合氏によるとアメリカの三つの誤算として挙げられている第1はベトナム戦争、第2は石油ショックを暴発させたキッシンジャー構想、第3はイランを失ったカーターの無策だといっている。そしてアメリカが日本を捨てる日が問題視されている。

また82年3月6日の新聞やテレビで報道された共同通信によると米国の作家の推論として昭和16年12月8日の日本軍による真珠湾攻撃をルーズベルト大統領が数日前に知っていたのは確かだが日本を参戦させ撃破してアメリカ主導の世界を形成すべく被害を甘受したということである。私はその日まで日本の真珠湾奇襲作戦の成功を不思議な位に思っていたがそれが米国の戦略に繰込まれていたというのに驚いた次第である。

去る10月2日のNHKのテレビで笹沢左保氏の青年塾の話も聞いたがその中では現代の父親に自覚が必要であることが強調されていた。私も同感であるが現在の経済社会態勢の下ではサラリーマンには転勤がつき物の様に波及している。父親が子供の教育にどれだけ自信が持てるか問題が多い。

21世紀を目前にして政治の面でも宗教の面でもまた日本人が第1に頼りにする経済の面でも更に軍事や思想文化の面においても対立する国家群の間で展望は明るくない。

私は今や人類の将来に容易ならざる状態が待ちかまえているように思うのである。これに対する方策は真剣に考えなければならないであろう。

豊さを追求する日本人の甘い考えを一掃しなければならない。敗戦の日からの再出発を若人の手で再び実行しなければならないと思う。そこには先見性と自立性が大切である。

その転換期が今年の後半というのが落合信彦氏の結論のようであるが私も特に今年の後半は21世紀への重要なステップとして重視すべきであると思う。年頭所感としては厳しいものとなったが考慮頂ければ幸である。

*岡田 實 (Minoru OKADA), 大阪大学名誉教授, 工学博士, 溶接工学